



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	徳川幕府による蝦夷地の創造 : 国家、領域及び地図
Author(s)	ボイル, エドワード・キーラン; Boyle, Edward Kieran
Citation	北大法学論集, 63(2), 178[179]-139[218]
Issue Date	2012-07-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49790
Type	departmental bulletin paper
File Information	HLR63-2_008.pdf



徳川幕府による蝦夷地の創造： 国家、領域及び地図

エドワード・キーラン・ボイル

序論

1835年、飢饉と長期にわたる債務を抱え疲弊していた徳川幕府は、諸国の大名らに対し、徳川幕府時代における領地の地図製作¹最終版に協力するように命じた。完成した地図は、その後幕府の勘定奉行によって1838年に編集された。全83鋪からなるこれらの地図は、現在デジタル化され、国立公文書館にて一般に公開されている²。本州の北側に位置する地域を唯一認識することができるのは、幕府によって作成された国絵図、すなわち、徳川将軍の統治下にある領域から大名の領地として分割された地図のみである。この「松前嶋図」には31の島々と450の村や集落が記され、それらに及ぶ幕府の統治権力の広がりや永続性を見ることができる。本稿では、歴史的産物としての地図を用い、またこれらの関係性を完全に明らかにしながら、徳川日本における統治領域の制定において、地図作成が果たした役割について検証する。特に、現在の北海道及び樺太（現サハリン、以下除く）、千島列島に位置し、徳川末期には蝦夷地として知られた地域に関し考察する。

¹ 本稿では、「地図製作」は図自体を強調し、「地図作成」はプロセスを強調する意図で用いた。なお、英語でも、Cartography と Mapping とは、あまり区別されていない（Edney 1999; Wood and Fels 1992）。

² <http://www.digital.archives.go.jp/gallery/view/category/categoryArchives/0200000000/0202000000>

この地図作成の過程において、形の定まっていなかった蝦夷地とその先住民は、オホーツク海周辺の日本及びロシアいずれかの領土及び国民へと分割されることとなった。そのため、この地図作成の過程は長らく研究の対象とされてきており、その歴史は現在、日本国内のいわゆる「北方領土問題」と密接に結びついている（岩下明裕 2010; 落合忠士 1971）。この地域に対し、ここ数年ロシア国内においても問題意識が高まりつつあるものの（Richardson 2011）、それはロシアの領域拡大における極東地域の範囲を成すに過ぎず、ソビエト連邦時代から抱える数多くの国境問題の一つに過ぎない。一方日本にとっては、本州に隣接した重要な地域であり、同地域に関する日本の統治権拡大の歴史は、依然として極めて重要な問題とされている。とはいうものの、近年の研究の大半は、アイヌ・和人間の関係性やアイヌにより構築された交易網を題材にしたものである（Howell 2005; Walker 2001; 菊池勇夫 2003; 高倉浩樹 2006）。それに対して本論では、領土の概念及びその領土が国家により如何に制定され、利用されたのか、という方法論に焦点をあてる。

国家の近代化に関する一般的な叙述においては、この蝦夷地が国家と地図の関係性を分析した例を提供しており、領土と国家それ自体の創造と動態化を地図作成が可能にしたという考え方を見落としている（Bagrow 1955; Kish 1949; Kitagawa 1950; Schütte 1952; Walker 2007; 秋月俊幸 1999; 船越昭生 1976; 高倉新一郎・柴田定吉 1940, 1952; 高倉新一郎 1956; 高倉新一郎編 1987; 高木崇世芝 2000, 2011）。しかしながら、近代化の普遍的目的論に取って変わるポスト構造主義的な普遍主義アプローチをとるよりも、最近の研究が強調するように、むしろ地図それ自体を歴史的に再び分析し直されなければならない。それは、第一には「一枚の地図の作製を取り巻き、それを支える複雑な文化的事実の集積」を精査することによって、そして第二には、一度作製されると「利用や交換、意味づけ」といった多様な回路において地図に付加されるものを考察することによって行われるべきである。地図は「確定された文化的成果」として、そして「その文化を作り出す要素」として看做すことに意味がある（Cosgrove 1999: 9）。つまり、可視化された物を介して意味が固定化されていく文化に属しているために、地図はそれ自身が作製された状況の中へと再び書き入れられていくのである（Mukerji 1997, 2006, 2009）。このことから、「一定の可能性の範囲」のなかで作用するが故に、特定の時期及び地域において社会的、文化的及び技術的關係の偶然性を明らかにすることで、地図作成のもつ重

要な歴史的意味が明らかになる (Crampton and Krygier 2005)。蝦夷地におけるこの「範囲」を概説することによって、また、この範囲は固定されたものではなく、むしろ常に変化している事を強調することによって、日本がこの領土を地図として表してきた歴史が目的論的なものではないということを検証することが可能となるのである。

1. 国家による領域の地図製作

本章では、蝦夷地と表された時代から、新たに誕生した明治政府が北海道として編入した1869年までの時期を検討する。すなわち、近世国家としての日本の領土拡大と地図作成の役割について焦点をあてるものである。そのため、地図製作過程の資料をわざわざ使って認識論的解釈を行うことは望んでいない³。領土を地図にする作業、つまりその縮尺を縮めながら一定の方法で実在する空間を把握することは、人間に固有の能力である。もちろん、一定の方式によって理解すること自体が国家の発展の指標となるということではなく、同様に、国家は地図を作ることができるか否かによって、進んでいる或はしない等と決められるわけでもない (Wood and Fels 1992)。しかしながら、我々が国家と考えるものにより制定された地図の利用には長い歴史がある。地図の歴史に伴って発展する文書作成や記録技術と同様、形をもつようになった地図の製作は、国家の「蓄積能力」の増大と関わっているといえる。またその能力は、国家の「記憶 (memory)」を劇的に増幅させると同時に制度の継続性を強化している (Giddens 1981)。そのみならず、地図の使用は国家の権力がどの領域まで及ぶのかを示すものであり、中国の政治文化においても、そういった形で言及され利用されてきた (Smith 1996; Yee 1994a; 海野一隆 2004)。中国大陸における律令制の先例をうまくモデル化することで、地図と地図製作過程の資料は、日本国家の創設当初から一定の役割を果たしてきたのである。初期の年代記においては、国家が地方の役人に対し、領土の境界の確定及び土地の測量を命じたことが触れられているし、耕作地への関心も現存する初期の大縮尺

³ 前近代と近代における地図の意識と、国家による地図利用との比較可能性は近年、議論になった (古典ヨーロッパとの場合、Riggsby 2003; Talbert 2008を参照)。

の地図に数多くみられる (Brown 1993; 木村東一郎 1967; 海野一隆 2004; 金田章裕・上杉和央 2012)。従って、地図作成の出現や利用のおかげで、日本の国家が一つの実在として作り上げられたとまで言うことはできないものの、ある意味ではそうした側面もあったとすることができるのである。

近年の研究においては、地図作成の精巧さを国家の発展に還元することを避ける傾向にある。1980年代以前の地図作成史においては、19世紀のヨーロッパで、地球上の測量地域をより正確に表すことができるようになり、近代における地図の製作が発展したと考えられていた (Andrews 1996; Bagrow 1985; Edney 1999)。地図とは世界の客観的、科学的説明であるものであるという主張を受け入れ、地図史は、国家による地図製作の制度化と正確性の向上と共に、ヨーロッパから地図作成の「最良の技術」がゆっくりと広がり、最後にはヨーロッパ以外の世界各国へと広まっていったということを経験的に主張しようとした (Edney 1993; Thrower 2007)。このような文脈において、地図製作は、国家の近代化の重要な指標となり、それを代弁するものとなるのである (Branch 2011; Konvitz 1987)。日本の場合、蝦夷地の立場がこの伝統的な国家の地図製作という文脈において、その曖昧さを反映している。徳川時代、蝦夷地はほぼ日本の統治下にあり、商業的にも日本の領土としておおよそ理解されていたものの、北海道南部の僅かな一画の「和人地」を除いては、「日本」そのものの外に位置するものとして看做されていた (Batten 2003; Howell 1995; Walker 2001; 大場四千男 1998; 榎森進 2007; 海保嶺夫 1978)。主要な文献によると、18世紀後半、幕府は海外列強、特に北部に位置するロシアの脅威を認識し、未確定だった領土を測量し把握することを目的としてこれらの地域の探索を開始させたといわれている。欧州列強との測量競争に駆り立てられるように、1810年代までにこの地域の領土統治は強化され、それを反映して「帝国主義を予期した」日本の地図作成の知識は向上したのである (Walker 2007; 川上淳 2003, 2011)。また、これらの地図は、日本の近代化の急務を「予期」し、列強の脅威を反映して国民意識を急速に高め、1868年以降の変革や明治国家の近代化の実現を可能とした (三谷博 1997; 高埜利彦 2006)。すなわち、諸外国の脅威、日本の近代化、及び地図の威信が特に効果的な形で合成されたのである。

ただ、このような経緯があるにも関わらず、北方地域に対する国家の地図作成の精密化は、単に徳川日本の自発的な「近代化」の過程を表しているにすぎないことも明らかとなっている。つまり、明治時代以降の「成功した」近代化

という歴史が、徳川時代の解釈に目的論的な見方をもたらしたにすぎないのである。地図製作史に「空間的転換」の広域化が与えた衝撃は、国家と地図作成との関係に変更を迫り、そして、国家の官僚制度は次第に洗練されて行くものだという考え方にも疑問が呈せられるようになった。つまり、国家が地図を作成する領域や国家の空間はアプリアリの性格を持つものではないというのである (Brenner and Elden 2009; Harvey 2001; Lefebvre 1991; Lefebvre et al. 2009; Smith 2008; Soja 1979)。特にブライアン・ハーレイ (Brian Harley) は、こうした地図の描写が経験的事実であると信じられるようになる過程を分析し、すべての地図を洗い直して文化的創造物として分析すべきだとしている (Edney 2005; Harley et al. 2002)。かの領域は、所有者未定の地とするために、北海道として日本の律令制下に1869年に編入される以前、一般的には「蝦夷地」と呼ばれ、日本の農業、つまり文明との繋がりを有していた地域以外は、荒れ果てた原野であった (Wigen 2010)。にもかかわらず、蝦夷地は、その概念及びその領域の存在がアプリアリなものとして認識されており、むしろ領域としての蝦夷地の創造は、多様な実践を通じた文化的産物によってなされたと考えられることはあまりなかった。しかし、こうした蝦夷地の文化的な創造において、特に地図作成は決定的な役割を果たしたといえる。この地域がその後、政治的な空間と結び付けられたことで、中心から容易に制度化されることが可能になった。すなわち「国家の影響」を検証することができるのは、こうした物質的、観念的な作為を集中して行うことを通じてである。つまり国家は、それ自体の要素を通じて自らを創出するのである (Helgerson 1986, 1992)。

地図作成が国家の領域の創造に関与している点は、徳川時代に特に顕著にみられる現象である。というのも、律令制下の領土は、ヨーロッパにみられるよりもずっと早くから実際に地図上に表されていたからである (Berry 2006; Wood 1994; Wood et al. 2010)。14世紀には、より早期に造られた原画を基にしていると思われる「行基図」が、律令国家の空間という抽象的な概念を国という区分へと分割している。こうした国ごとの区分は、戦乱が長きにわたり、朝廷の実質的な統治権力が衰退していった時期にも存続し続けた (海野一隆 1994, 2005; 黒田日出男 2001)。豊臣秀吉の先例にならい、徳川家康は、国々の地図を帝に献上するように命じたが、これは、律令制下の領域に、家康自身の統治権力が及んでいることを示そうとしたものであった (Ooms 1998; Unno 1991, 1994; 杉本史子 1994)。さらに、徳川氏は、律令時代の地理を基礎として

統治を確立したため、理論的には帝が地図作製を支えたはずなのだが、その後天皇から地図製作を切り離した。そして、杉本の表現を借りれば、「元禄国家図では天皇を意識した形跡は見受けられず、同図は土地をめぐる諸階層の係争を裁く『公儀』として『国』を『確定』することを目指したものであった」（杉本史子 1999: 159）。従って徳川幕府の地図作成は、欧州の地図と共鳴するところがあるということもできる。すなわち、「権力中枢を中心に」据えて構成される「個人的」な絶対君主支配から国家による支配へと移行し（Anderson 1991; 1983）、それまで君主が有していた可視化された「物理的力」は、国家自身が領域を表現する支配の形へと移行していったのである（Bartelson 1995; Biggs 1999; Kantorowicz 1957）。

ウィニチャクル・トンチャイ（Thongchai Winichakul）の研究にも、上記の概念を推し進めるアジア圏に関する言及がある。すなわちタイでは、近代西洋的な地図製作を国家が用いることで、国境を記し、国家自身の「地理的身体」（Geo-body）を創造したのである（Thongchai, 1994）。メアリ・エリザベス・ベリ（Mary Elizabeth Berry）は、国家が地図を作り、地図が国家を作るといふトンチャイのトートロジー的理論を適用し、豊臣秀吉・徳川家康の地図作成を国家中心的に、または記号論的に分析した。ベリは、「国家設立者」が空間政治のビジョンによって、実際の戦国時代の「混乱」と情報をコード化する「混

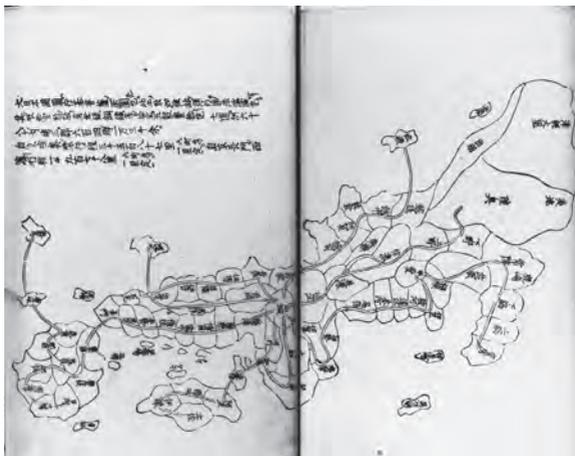


図1 『拾芥抄』行基式の日本図

秋岡武次郎編：日本古地図集成

乱」の双方を克服できたことや、近世日本の「地理的身体」を創造する条件とその特徴について述べている（ベリ、2001）⁴。「地理的身体」という概念と、「^{ナショナル}国家」意識が構成される際に印刷物の流通が果たした役割に着目したベネディクト・アンダーソン（Benedict Anderson）による洞察とを組み合わせることは、その後、多くの研究者にとって抗いがたいものとなっている（Barrow 2003, 2008; Elliott 2000; Fortna 2002; Hostetler 2000, 2001; Ramaswamy 2001, 2002）。2006年に出版した著書において、ベリもまたこの議論を適用し、日本国家の領域的広がりを地図的に表現したものが流通したことで、日本という社会、あるいはベリの言うところの「^{ネーション}徳川国家」が出現する条件を整えたと主張している（Berry 2006）⁵。ベリは、制度化された技術という観点ではなく、特定の文化的表現という観点から徳川時代の地図製作をとらえるが、しかしそれは結局、従来の地図の「^{モダニティー}近代性」の強調に代わって、地図を再び「^{ネーション}国家」の単なる指標へと還元してしまうことになるのではないだろうか。

たしかに地図製作は、新たな効果を生み出す道具として見るべきものである。地図が単なる国家領域の表象以上の役割を果たすという考え方は、じっさい北方地域における日本の地図作成の性格を説明するうえでも有用なものである。蝦夷地の創造は、最終的には国家の領域、あるいは「地理的身体」を創造するという、徳川政権が目論んだものより広域のプロジェクトから最終的には切り離すことのできないものであった。つまりそれ自体、統治が將軍の町である江

⁴ 2001年の論文でベリは、近世日本の「地理的身体」とそれを支持する地図的発想（Map-mindedness）が誕生した理由を、国家の役割よりも、秀吉・家康の個人的な経歴に還元しすぎているように思われる。地図作成プロセスは、ベリによれば国家建設と「一七世紀地図における空間のコード化」のプロセスであるが、本稿では、それをある既存の空間認識をコード化するプロセスではなく、その後も継続して行われた地図作成自体をプロセスとして理解することに力点を置きたい。つまり、ベリは、徳川幕府が自らの政体を正当化するために行基式日本図を「復興させた」と説明しているが（ベリ 2001: 176）、本稿では、国家の空間認識は徳川時代をとおして繰り返し（再）生産され、（再）表象され、（再）創造されたことを重視する。

⁵ ベリは、弟子のマルシア・ヨネモトの研究より大きな影響を受けて（Yonemoto 2003）、2006年の著書から、地図様式に特徴付けられて明治国家と対立した「^{ネーション}徳川国家」という概念を用いるようになった。第2章で述べるように、本稿では近世と近代のあいだに絶対的分岐をおく認識を回避したい。

戸に再び集権化されるという過程の一つの構成要素だったのであり、地図を差し出すのと共に、正室や年貢或いは自分自身の身体を中央に差し出すということだったのである。関ヶ原の合戦以降、徳川政権の「地理的身体」は、律令制の領域を超えて政治的・軍事的ヘゲモニーを主張することにより、国家によって地図化されたこの律令制の領域への主張を行うと同時にその輪郭が描かれてきた。この「地理的身体」は、決して安定したまとまりではなかったものの、徳川時代の地図作成を通じて律令制の領域それ自体を（再）生産することで、国家の領域に対する権威の及ぶ範囲を、継続的に定義し再定義する過程であった。この領域に対する概念は、徳川時代を通じて国家及び商業的地図製作において維持され、地図上に示された行政区画は、国家それ自体とは一見無関係に見えるものの、国家の領土のビジョンを地図上に示されたものとして構造化するのに貢献した。このようなビジョンは、「国絵図」として知られるプロジェクトと特に関連している。国絵図は、その名称が示唆するように、律令制度下の「国」を基に、領域の表象を正統化し、そして国ごとに行われた検地とリンクすることによって、これらの国家地図は、商業的地図作製に代表される国家構造を提供したのである⁶。

律令時代の地理を国家の領域の基礎として採用したことにより、徳川政権の権威とそれ以前の権威とが結びつけられることとなった。朝廷の権威の外に位置していた蝦夷（えみし）と呼ばれる人々に対する朝廷の膨張の初期の歴史は（Batten 2003; Hudson 1999）、陸奥と出羽という北方の二つの国の過剰な広さによって、事実上見てとることができる。そして、農地と未開の地との境界が東北地方へ押し上げられるにつれ、中世初期には、北方地域に3種の蝦夷（えみし、あるいはえぞ）の人々について記録がなされ、少なくともそのの一つ「渡党」は、今日アイヌ人として知られる人々に関連しているとみられている（Howell 1994; 海保嶺夫 2006; 菊池勇夫 1994, 2003）。その名前自体が、日本の北部に該当するとみられている「蝦夷島」から渡ってきた人々であるということを示唆している。もっとも、これらの島々が地図上に現れてくるのは1471年に作製された朝鮮の地図のみであり、そこには夷島という島も、本州北東部に位置する女嶋、雁道などの島々と共に示されている（室賀信夫 1983）。蝦夷地

⁶ 川村によると、幕府撰国絵図プロジェクトは1604年、1644年、1696年及び1835年の四回に渡って実施された（川村博忠 1984, 1990）。



図2 正保日本図の蝦夷地

秋岡武次郎編：日本古地図集成

の存在は、本州全てを徳川政権の定義した律令制下の空間と考えることを可能にした。そしてこの表現が、国家の地図製作と、商業的な地図製作の両方を支配したのである。徳川時代全般を通して、蝦夷という空間を領域として「枠にはめる」(Yonemoto 2003) 際には他の伝説的な場所と同様に見なされており、確かに徳川時代の大半の商業的地図においては、蝦夷の「実在する」島々は、「架空の」存在と大して変わらないものとして看做されていた(上杉和央 2010; 山下和正 1998)。

徳川時代の「地理的身体」の作法は、地図や年貢、謁見等の定期的な献上を通じて明らかになっていき、蠣崎氏の津軽海峡をまたぐ支配力によって、本州北部へと拡大された。雄島の南方にある「日本の交易所」の統治者は、16世紀後半には、中央権力の直接支配下に入り、姓名も松前氏へ改名し、領土の地図を江戸の将軍へ献上するに至った(Walker 2001; 菊池勇夫 1994; 高木崇世芝 2006)。蝦夷地という表現自体は、このような律令制度下の領域を固定化させる要素の一つに過ぎない。蝦夷への実際の移住は18世紀後半まで開始されな

かったものの、本州北端へと領域が明確に拡大したことは、徳川政権の権威を結果的に強めることにもなった（Ravina 1999; 国絵図研究会編 2005; 浪川健治 1992）。この地図作成による固定化は松前藩によって成し遂げられ、代々の将軍によって発行された黒印状の権威によって根拠づけられていた⁷。というのは交易が強化されれば、蝦夷地における交易を独占している地域の価値が高まることになる。松前藩のこの主張が正当化されるためには、松前藩としては、これを幕府に認めてもらう必要があったからである。

1599年には既に松前藩によって蝦夷地の地図が製作されていたが（松前景広 1643）、国家により蝦夷地の領域が最初に表現されたのは、いわゆる「正保日本図」においてである。これは、1633年の初期の徳川将軍によって行われた国の測量と1644年に再編された地図に、ほぼ即した形で構成されている（高木崇世芝 2006）。今日この地図を見ると、他の地域の精密度の粗さに比較しても蝦夷地の表現のゆがみは著しい。正保日本図や他の日本総図における蝦夷地の小ささは、一般的には、松前藩が、他の大名に幕府が求めた縮尺に合わせるのに失敗したからだと理解されている⁸。とはいうものの、これらの地図上にある渡島半島南部の表現の精度が大きさと形の両方において高いのと比べてみれば、これまで言われてきたように、この描写のゆがみが故意によってなされたものではなくて、海上から正確に測量する難しさによるものであるということを推測する方が自然であろう⁹。正保日本図は、むしろ蝦夷地をどのように領域的に定義していくのかという方法を創造していく過程の中で理解すべきである。な

⁷ 「松前志摩守慶広に蝦夷地交易の制三章を受らる。其文にいふ。諸国より松前の地に出入する者。慶広に其旨告ずして夷人と交易せば典事たるべし。慶広に告ずしてみだりに渡海して夷人と通商するものあらば、速に府にうたへ出べし…」慶長9・1・27（海保嶺夫 1985: 101）。

⁸ また、松前藩が幕藩制国家の辺境地位を占めることを示している。国絵図の基準化については特に川村博忠（註6）を参照。川村が正保国絵図プロジェクトのもとで六寸一理（約二万一千六百〇〇分の一）が標準となったと述べている。また、秋月が示すように、松前の国絵図をこの縮尺にすると、縦横20メートル以上の非実用的な大地図になる（秋月俊幸 1999: 19; 海野一隆 1999: 163）。

⁹ このような海上からの測量の困難さは初期のヨーロッパの測量史にもみられるが、それは海上の距離を地図上に縮小するのが困難さによるのが通常の原因である。（これについてはFernández-Armesto 2007: 741を参照）。

ぜならば、松前藩が支配地を最大化することは松前藩にとって有利なことであり、それは、徳川政権の国家が自ら交易の独占を正統化した地域として、現在の北海道、樺太及び千島列島に位置する全域が蝦夷地の領域の範囲に統合されたということになるからである（Walker 2001; 秋月俊幸 1999）。

従って初期の徳川幕府の地図作成は、律令制下の朝廷の空間を（再）構成し拡大するためのみならず、この地域の外側にあった未開の地、つまりは蝦夷地を定義するにあたって貢献した。この地域は、本州、九州や四国の国々の空間と同様に、幕府に献上された諸地図上に確定され、境界が示された。蝦夷地の空間はこのように徳川時代の地図作成の中で作られ再生産されたものであり、律令制下の空間とは別個に生まれたものの、徳川時代の地図作成によって「枠をはめられた」律令制下の空間と合体していったのである。これはそれ自体を正当化する文化的制定のプロセスであり、蝦夷地を表現可能な境界づけられた領域的空間として創造し、一方でその空間の中で自らの領域的権威を改めて確定しているのである。蝦夷地は、このような形で内からも外からも現実化されたのであり、政治的空間を地図に表現することで、最終的には、蝦夷地を創造した政治のプロセスを隠してしまうような文化の所産なのである。これによって、近世国家の地図製作全てが意識的にネーションを表しているわけではなく、従って、近世から近代へと、国家領域の概念が移っていくということとはできないということがわかる（Kratochwil 1986; Neocleous 2003; Spruyt 1994; Teschke 2002）。徳川政権が利用した地図製作の手法は確かに統治権威を正統化する上で貢献したが、将軍自らが支配者となってネーションの領域を「代表する」というよりも（Conley 1996; Jacob and Dahl 2006）、その制度化は朝廷支配から将軍中心へと取って代わるものであったといえよう。

本章では、近世日本を存在論的に形成したものとしての地図作成の過程、そしてその過程の中における蝦夷地の役割を概観してきた。しかしジョン・ピクルス（John Pickles）の説くところによると、このような歴史は「地図を未だに一つあるいは他の関心対象、つまり、地球を表現する方法の進歩、権力の道具、世界的『本能』や『衝動』の物質的な形といったものだけに還元しがちである」。我々も同様に、地図を単一の言説へと還元したり、地図を単一の歴史で説明することにに対し注意深くならなくてはならない（Pickles 2004: 89）。意識的に比較の観点をもって物事を見続けるならば、国家による領域の地図作成に関する研究が、地図を何かの単なる指標と位置付けるのではなく、経験論的

に狭い限定的な議論を超えてより広く共鳴をもたらすのに、如何に役立つかを強調することとなるであろう。国家は、領域の創造のために地図製作を利用してきたが、全てのこの領域の創造が国家の作法によって働きかけられるわけではない。次章では、異なる国家が異なる領域を創造する過程、及び国家が領域を創造する方法について検証する。

2. 領域の確定及び再創造

日本のより広い地図製作の背景の中で、蝦夷地は領域として理解されてきたのであり、このような地図の歴史を正しく読み解くには、より広い背景を認識することが必要となる。近代ヨーロッパ帝国主義の創造が、地図上の全世界を包含するということを考慮に入れた観念的デカルト主義によってどのように表されてきたかということのみならず、実際のところ、それに如何に依拠しているかを明らかにするために、これまで膨大な研究が行われてきた (Cosgrove 2003; Olsson 2007)。同様に、近年、ヨーロッパとは異なる背景の中で作成された地図を理解し、それらを支えている空間認識を知るための研究に、さらに多大な労力が費やされてきた (Harley and Woodward 1987, 1992; Woodward and Harley 1994; Woodward and Lewis 1998; Woodward 2007)。そうした努力は、世界には一つの歴史、一つの地図作成の系譜しかなく、すべての地図はそれに含まれているとの観念から脱するために行われてきたのである (Dodge et al. 2009; Wood et al. 2010)。異なる地域に固有の空間的關係性の認識は、世界をどう「見る」のかという特別な方法、すなわち「伝達を行う構造を組み合わせている」(Habermas 1991)、あるいは「意味のシステムを秩序づけている」(Geertz 1973)、それぞれの社会の産物と強く結びついている。言い換えると、地図作成の様々な方法や、違う文脈で行われる地図作成は、それ自体が作られる文脈に沿って「合理的に」分析されなければならないのであり、外から押しつけられた基準に従って判断されるべきものではない (Turnbull 2000)。

松前藩によって製作され、幕府へと献上された蝦夷地の地図は、蝦夷地を領域として創出し、その境界を確定するために使われた。前章で確認したように、松前藩の領地は徳川国家の支配の及ぶ範囲内において正当化されていた。国家としては、その領土を少し変わった形であると考えていたが、將軍権力への謁見を伴っており、国絵図製作のプロジェクトでもその領域の範囲が可視化され

ていて、徳川政権の秩序の一部であることは明らかであった (Vaporis 2008)。もっとも、松前藩が律令制度の領域の外部に位置していたという事から、松前藩は自ら権威の及ぶ地域を確定し、自らの領域空間をも創造することが許されていた。元禄国絵図は、対象をより拡大した支配地の地図である。松前藩は、当時まだ大名としては看做されていなかったものの、自身の地図の製作と提出を課されていたのである。これは天保国絵図にも引き継がれ、松前藩は日本の他の支配地と異なり幕府の指示を受けずして再び独自に自らの管理下にある地域の地図を製作した (高木崇世芝 2006)。松前藩は、ネーションについてトンチャイが言及しているところの、描写しようと意図するもの「それ自体のモデルではなく、そのためのモデル」を、地図を通じて主張しているといえる (Winichakul 1994)。それでも、地図や、年貢の江戸への献上や江戸出府による謁見等に見られる松前藩の將軍秩序に対する服従は空間的慣習の第一層を形成し、この層が地図製作過程の資料自体に見られる第二層を正当化したのである。

異なる国家の地図作成の方法が、認識論的課題に関する国家それ自体の理解を反映するという考え方は、地図作成と、その作成が行われる知識体系とを結びつけて考えるという形で、早くから見られていた。初期のロシア帝国、特にロシア帝国の統治圏がシベリアに拡大する過程に関するヴァレリー・キヴェルソン (Valerie Kivelson) の近年の研究に、示唆的な事例をみることができ (Kivelson 1999, 2006, 2009)。キヴェルソンは、この国家の地図製作を特にロシア帝国の伝統の文脈の中で再定義しようとしていた。特に17世紀後半から18世紀前半におけるセミヨン・レメゾフ (Semyon Remezov) の業績に関する研究において、キヴェルソンは、レメゾフによる地図製作が、ロシア帝国の空間を支え創造することにおいて、如何に貢献したかを検証しようとした。ロシア帝国は、西洋の帝国とは異なり、民族性や宗教、あるいは階級が統一されておらずそれぞれが独自であり、ただ皇帝に対する根本的な忠誠によって結びつけられていた点に特徴づけられるものである (Burbank et al. 2007; Kappeler 2001, 2004; Slezkine 1994)。すなわち、ロシア帝国のある特定のビジョンが地図製作から読み取れるというだけではなく、地図作成それ自体が、共通性のある一つの様式で国家のビジョン自体を形作ったということである。

日本の場合でみると、国土全体を把握するためにそれぞれの国の地図が集められて一つに編集され、国絵図として地図上に描写されることにより、最終的

にはその地図作成に採用された枠組みの中で、蝦夷地の領域を把握することができるようになった。しかしながら同じ一つの地図には描かれたけれども、最後の地図編纂のプロジェクトとなった天保国絵図までは、我々がいうところの「正確な」地図と呼ばれるには適さないものだった。幕府の領域に対する支配のビジョンは、律令国家の地理と国を仕切る区画を継承することで支えられ動機付けられた。地図には幕府によって統治者が記され、小さな楕円形の村が描写されたものの、將軍は百姓たちという基盤から大きく切り離された権威の体系の裁定者のままであった (Ooms 1996)。国絵図のプロジェクトを通じて、精密度が向上したという蓄積をみてとることは難しい (川村博忠 1990; 近藤守重 [近藤重蔵] 1906)。当初から、領地に対する統治権を描き出し、領域の権威及び石高と関連づけて地図は作製されており (杉本史子 1999; 藤田覚 1980)、地形に村の石高が表示される形式の国の地図が標準となっていたためである (国絵図研究会編 2005)。幕府の意向によって取り入れられ、正保国絵図から始められた国絵図は、我々が使う正確さという言葉よりもむしろ、視覚上の一貫性という基準から見て、ずっと高いレベルのものであった (川村博忠 1984, 1990, 2010)。

松前藩は編入されたとはいえ、律令国家の地理上では外部にあたり、何ら農作物を収穫することもなかったため、国家の地図製作の知識構造からは、把握し難い存在であった。それでも蝦夷地への領地としての拡張は編入され、地図上に定義されていったのである。このような領域の曖昧さは、海外との接触をもっていた他の地域の状況と比較してみることもできる。このような地域は、近年の日本の史料研究では、大きな焦点となってきた。この他の地域とは、オランダ東インド会社のある長崎、朝鮮との接点があった対馬、及び琉球を支配していた薩摩である。オランダ東インド会社は、地図製作上の問題を殆ど想起させなかった。というのも、同社の領地が出島に限定されていたためである。もっとも、同社は後に江戸に赴き、その地域を徳川政権の政治的空間にあるものとして改めて公認している。また対馬は、律令制下からの国の一つを構成していた。明治時代に至るまで、宗氏が釜山における日本人居留地である倭館の運営を維持し、その穀物のおよそ3分の2を朝鮮に依存していた。九州北部に所有していた宗氏の領地の石高は一万石であったが、対馬全体の農業生産は乏しいものであった (Lewis 2003)。対馬の国絵図は、その他の地域と同様、多少色づけされた楕円で示される農村があり、二つの区画に色分けされていたも

の石高の調査はされておらず、従ってその表示も記されていなかった（福井保 1984）。しかしながら、その他の記載方法は、「ナショナル・スタンダード」に則って製作されていた。

最後に、琉球王国は、1609年に薩摩藩が侵入し琉球国王の服従を強制するまで、日本のどの国家にも属してはいなかった。薩摩藩は、後に琉球の領土の大半を琉球国王の領地として認め、土地の調査を指揮して、大名への納税を課した（Sakihara 1967）。徳川家光は、薩摩藩の琉球の石高への編入と、琉球が中国にも同時に朝貢する関係を同時に承認し（紙屋敦之 1990）、後者は、日本の統治の対外的な動向を琉球が可能な限り最小限にしているという薩摩の主張を説明するものであった（Smits 1999）。蝦夷地と同様、正保時代の調査によって初めて地図が製作され、島津藩による琉球王国の統合が地図上に表された。もっとも、奄美島については、琉球王国が支配する領地として直接編入されていた。外観上、この地図は、基本的には日本の他の地域と同様であり、琉球政府の慣行は何ら変更を求められず幕府の地図に融合された¹⁰。琉球と対馬の双方は、地図製作上、松前藩よりも遥かに早い時代に領土の標準モデルとして編入されていたのである。幕府による空間的秩序、すなわち同質であり根本的には交換が可能な農村の集まりによって構成される国が形作る領土のビジョンは、それ自体の権威を創造したのである。

松前藩の地図はこのような空間的支配の文化を念頭に分析されるべきであり、特に蝦夷地の領土が如何に空間的に埋められていったかという点に着目しなければならない。まず1633年、将軍が送り込んだ探検隊が、東端は石崎まで、西端はモナイ（茂内）まで境界を引いた（淡斎如水『福山田記』、Edmonds 1985）。主にそれに沿って、支配の範囲が確定されたのである。正保国絵図では、茂内の位置に西側沿岸が描かれ、「是ヨリ馬足道ナシ舟ニテ往来」と特に明記されている（中村拓 1974; 落合忠士 1971）。これは1633年の状況であり、1644年に地図が提出された際には、ほぼ熊石まで境界が拡張していた（森森進 2007: 180-82; 海保嶺夫 1984: 23）。このように、将軍の派遣した調査と、地図

¹⁰ 琉球の場合、郡・村のかわりに間切という伝統的な行政区分が国絵図上に表現され、島津家の石高に編入された奄美諸島も間切制度に即して地図作成された。地図上、各村を間切ごとに色分けし、国絵図・郷帳における石高も間切ごとに表示した。

上の道の描写とは互いに影響を及ぼし合っている。東側の領域でも同様のことは見受けられ、石崎が明示されない一方で、石崎の5キロメートル西方に位置するシノリ（至則）が道の終点としてはっきりと描かれている。この島の中央に「南ヨリ北へ陸道ナシ」と記されている一方で、「和人地」と「蝦夷地」との間に明確な境界はない。例えば、和人の上の国やトマリ（泊）のような領地は「エゾ」と記されているものの、更に北方にあるオトベ（乙部）やモナイ（茂内）には記されていない（榎森進 2007: 167に比較）。しかしながら、この幕府による探査の対象外である大半の地域については、島のほとんどを含めて、末尾に「エゾ」と記されているのである。ここから、蝦夷地を自分の領土として記すということで、松前藩が蝦夷との交易を独占する権利の訴えを通じ、この領域に対する主張を正統化しようとする動きを明確にみてとることができる。

正保国絵図と元禄国絵図の領域の表現の違いはほとんどないように見えるが、千島列島は、奇異にもより小さく描かれている（国絵図研究会編 2005: 20-23）。もっとも、正保と元禄の調査との間には、1669年から1672年にかけて、近世アイヌ史上の顕著な事件として知られるシャクシャインの反乱が起きている。多くの文献にも記されているように、この反乱の余波により松前藩の直轄地と蝦夷が居住する地域が明確に区分され、これをめぐってより多くの主張



図3 元禄国絵図
北海道大学北方資料室

がなされることとなった (Walker 2001; 海保嶺夫 2006)。これは地図上でも見ることができる。元禄国絵図は、新しい領域の境界を反映させて「是より蝦夷地」と明示し、在郷内にある全ての居留地を「村」として示し、それに対して蝦夷地の領域には、単に名前が記されるのみとなった。この地図は81の和人「村」を記すのみならず、140の蝦夷人「居所」と48の島々をも描いている (松前藩 1906; 羽田野正隆 1985)。境界は実際のところ不明瞭なものであり、居住地の分離を明確に記しているわけではなく、蝦夷地全体の領域における松前藩の位置が、幕府に従属しており蝦夷地の支配はあくまでもその下でのものだという事態を変えるものではなかった。他の国における地図作製のプロジェクトに対する幕府の干渉は、歴代の将軍が移り変わるなかでより一層顕著なものとなっていった (杉本史子 1994)。その一方で、松前藩に限っては松前藩が主張する地図上の領域を制限することはなかったのである。そして居留地を区別する政策は、天保国絵図においても明確に表れている。地図それ自体の形状のみならず、元禄国絵図では140だった蝦夷人「居所」を322にまで増やし、それらに対する統治権を主張したという事実からも、地理的知識の蓄積が見てとれる。これら322の「居所」は、地理的にも地図製作学的にも、直接統治下にある128の「村」と明確に区別され、31の島々は全面的な管理下にあると記されていた (福井保 1984: 366-72)。他の領域とは異なるという概念に適合的であり、他とは異なる権威の基盤を強調することにより、松前藩は、徳川の領域国家のなかに自らの権威下にあると考える領域を地図上に示すことでその編入を認めさせるのに成功したのである。

以上のことによって、ギヴェルソンが光を当てたロシア帝国と同じように、他の地域の領域についても、近代帝国主義の地図作成に還元されない様々な地図作成の方法により、他の地域の領域を国家に編入することができるということを知ることができる。もちろんロシア帝国は、欧州及び西洋の特徴やその他の点を考慮すると、曖昧な地位にあることは否めない (Lieven 2002)。しかしギヴェルソンがここで描きかかったのは、18世紀のロシア帝国に導入された全体主義的な西洋帝国主義と対比して理解される、より「柔軟な」空間理解であった (Kivelson 2009)。ギヴェルソンによるロシア帝国の地図作成の論文を、ローラ・ホステットラー (Laura Hostetler) による清帝国の論文と対比してみると、興味深いものがある。ホステットラーは、清帝国も、世界の初期近代帝国における地図製作のプロジェクトと同様のことを実践したのだと強調する

(Hostetler 2009)。伝統的な中国の地誌にみられる地図には、明らかに西洋の地図製作法と異なるものが見受けられるが (Yee 1994b, 1994c)、康熙帝及び乾隆帝が統治していた期間には、地図製作事業のプロジェクトが領域に対する支配を把握し、それを誇示するために、初期近代国家が動員する最新式の地図製作技術を動員しているということなのである¹¹。三角法で測定された清帝国の地図は、清帝国の領域の境界を、対内的にも、またヨーロッパ諸国の地図上においても確定するのに寄与したといわれている¹²。

これらの相対的な歴史の断片は、それぞれ異なる方面から指摘されてきたものであるが、当時の欧州国家の地図製作を特徴づける「帝国の」「近代的な」科学的地図作成と、ほぼ同一のものとして理解することができる。これは、ヨーロッパにおける全ての地図作成を、デカルト絶対主義者の空間的概念によって支えられる西洋の帝国主義「特有」のものともみなして、それに還元するものである。キヴェルソンは、レムゾフによって製作された民族学的地図が、初期の近代ロシア帝国の空間概念とは根本的に異なると主張するが、ホステットラーは、中国とヨーロッパ帝国における固有の相違を示すことで、清帝国との類似性を強調する¹³。両者の研究は共に、ヨーロッパ帝国の全ての地図作成を、数学的で合理的な科学として具象化している点では共通している。しかしこれは、欧州式の科学的地図を「初期近代」の科学的帝国の指標へと還元し、「芸術」あるいは「科学」としての地図作成という、区別を再び呼び戻すリスクを有し

¹¹ これは、History of Cartography の中で中国についてコーデル・イー (Cordell Yee) が展開した論点と正反対となる。イーの基本的な強調点は、「16世紀末から20世紀の頭まで、中国の地図作成はヨーロッパからの影響をさして受けなかった」ことであり、地図作成も含む中国の特定な文化的一貫性が近代化（あるいは西洋化）によって失われたというものである。また日本の場合、ヨネモトもこうした視座に立つ (Yonemoto 2003、また Millward 1999も参照)。

¹² これは、西洋中心史観を越え、ユーラシアの東と西の端における状況を比較し関連づけることによって、世界的な近世史を創造するものである (例えば、Darwin 2007; Morris 2010; Perdue 2005; Pomeranz 2000; Wong 1997)。

¹³ 同時にキヴェルソンは、帝国の形成とそのビジョンと、1930年代におけるソ連時代のスターリン国民政策との単線的な繋がりもこれらの地図で可視化できると主張しているが、支持できない議論である。ポストニコフにより、レムゾフ以降、次代のロシア帝国の民族地図が1872年に作成された (Postnikov 1996: 148-49)。

ている (Perdue 2005: 446)。しかし、重要な示唆に富むマシュー・エドニー (Matthew Edney) による研究が示すとおり、「精密さ」の概念と科学的地図作成の概念は、それ自体がイデオロギーなのである (Edney 1994)。イギリス国家の地図作成は、社会的秩序のなかで権威を強化するために、探検家と地図製作者によって利用されてきた。この専門家らが、「地理的情報の提供のみを対象とする、経験主義的で客観的で間違いのない科学」としての地図製作の普及を促進させたのである。そして、彼らの科学的信用は支えられ、「専門家のこれらの業績によって、言語やイメージを描写する政治文化の一部を形作る」重要な要素が構成されたのである (Sahlins 1990: 1425)¹⁴。しかしながら、このようなイギリス国家の客観性と正確さを代表する人々による主張は、「測量が混乱を招く」として現実によって即刻覆えされたのである (Edney 1997: 25)。マーク・バッシン (Mark Bassin) は、実際に作製された地図は、「このように深く『傷つけられた』パノプティコンであり、自分達の絶対的及び合理的統治に対する英国人自身の幻想に過ぎない」と強調した (Bassin 1999: 111)。この精密性に対する主張は、単なる主張に過ぎないものではあったが、これがイギリス国家のインド亜大陸の領域における統治と地図作製のプロジェクトを促進したのである。

蝦夷地への数学的測量技術の導入を、より近代的な領域支配の例示として論ずることも容易かも知れない (Stephan 1969; Walker 2007; 室賀信夫 1983; 川村博忠 2010)。周知のとおり伊能忠敬は、最初の測量において今日の北海道南方の海岸にあたる「吉岡」から「西別」までの海岸線を正確に地図上に記した (渡邊一郎 1997)。その後、伊能忠敬の弟子にあたる間宮林蔵が、更に奥地の樺太、そして1821年には本蝦夷地の明確な地図製作に貢献した (秋月俊幸 1999)。しかし天保国絵図には、松前の島やその他の群島等、伊能忠敬による国家の海岸線上の測量の痕跡はどこにも記されていない。地図製作上では、他

¹⁴ ホステットラーは、地図作成の技術や制度の類似性のみならず、測量した国家地図が領土権の主張を確立させたという共通点を主張し、グローバルな近世帝国地図作成史を提唱しているが、清朝の地図輸出禁令を考えれば、それは難しいであろう (Hostetler 2009)。ウォーカーも、樺太における地図作成の帝国主義性を強調する論文で、同様なことを述べているが、シーボルト事件などを考えれば、これも難しい (Walker 2007: 283-313)。

の辺境地域と同様に、この地域も日本の統治下として記され、表現されることもできたのであり、徳川国家の領域に対する概念は、伝統的な理解を超えて、このように東北の更に北方の地域にまで拡張され得るものだった。松前藩が自らの領域を測量した技術は、国家の権威の拡大に中核的な役割を果たしたが、このような地図作成は近代性という単純な概念に還元されるものではない。領域に対する国家の展望が、国家の構成要素として大きく占めるようになり、この領域の多様性が同様に内部に包括されたのである。これは、対馬、琉球、そして蝦夷地の3か所の辺境が地図上に同一規準で初めて描写された天保国絵図によって確立したといえる。地図には、国家の領域としての均質性が示される。すなわち、日本の農村の一つの村として描写されること自体が、国家の領域としてみなされる過程の一部なのである。この点、蝦夷地は、地図上に同一規準で描写される一方で、日本の人々とは明らかに異なるという事実を明確に記されたともいえる。松前藩が組み込まれていた知識構造によって、松前藩自身の地図作成の記号が幕府に提供されたのである。蝦夷地の、蝦夷地における地図作成の歴史は、地図を支える空間的概念に結びついているといえる。

3. 領域の（再）創造、国家の（再）地図作製：

前二章では、地図作成が、いわゆる蝦夷地の創造において寄与した点を検討し、日本の領域について理解すると共に、蝦夷地が創造された過程を検討した。本章では、地図作成の効果を通じて国家が領域を明確に把握し、それを領域として扱うまでの過程を検討したい。初期のヨーロッパ帝国にとって地図作成とは、諸外国に対し領域の保有を概念的に主張する申し分のない手段だった (Brotton 1997; Schmidt 1997; Zandvliet 1998)。地図化することは、単に領域の支配が明確になるだけでなく、「地面上」、更には欧州を取り巻く諸事情の中で支配を開始することを意味するのである (Burnett 2000; Driver 1992, 2001; Edney 1997, 2009; Godlewska and Smith 1994; Seed 1995)。このように、地図製作を帝国主義における特に重要な分岐点と看做すことには、「文書から、そこに表現された世界へと行き先」が開かれることになるのである (Häkli 2001: 414; Latour 1987)。とはいうものの、これまでみてきた通り、その重要性は帝国主義の遠隔地支配に対して限られたものではなく、地図は国家の領域の概念を構成するためにも極めて重要なものといえる。領土が、その領域の自画像に

加えられていく過程は、その領域を明確にし、知識と情報を得て、そして特に既存の文化構造に新しい知識と情報を加えることである。

蝦夷地の場合、蝦夷地を地図化する第一次的意義は、この地域を農地開拓のために再生することにあった。17世紀後半頃から既にこの地の農地開拓は提言されていたものの（高倉新一郎 1933b, 1933a）、交易を独占していた松前藩がその既得権益を明確に固持していたため、大半は実現されずにいた。植民地を扱う文脈においてよくみられるように、「探検家は、空間的、経済的、そして社会的組織に対する先入観と、仮説と共にやってくる…。土地の探索及び将来的な入植の計画という二つの過程は切り離せない。すなわち、この過程は複雑で、しばしば探索隊の地図や文献に明らかに関連するものである」（Nobles 1993: 13）。すなわち、領域を「開く」という概念は、領域を国家へ統合させ、生産力をもたらすという双方の意味を有し、国家の代理人によって実施された地図作成によって、可視化され続けた。この点は特に、近藤重蔵による「蝦夷地図」に示されている（近藤重蔵 1993）。近藤重蔵による地図は、その数十年以上前に関東の穢多の頭であった弾左衛門が7万人の穢多・非人を集めて蝦夷地へ送り、「此段別千百六十六萬四千町歩石十分一、百十六萬六千四百町歩、新田畑開発可相成積」と報告をしたことを受けて、国土の空白を埋めるべく作製されたものである（小林茂 1995）。このような取組みは、領域に対して具体的な効果をもたらすことはなかったものの、国家に対しては、領域を把握しやすくさせたという点で「事実を要約し変換する力」を実証したといえる（Scott 1998）。18世紀後半、日本の探検家と幕府の要人は、蝦夷地を農業開拓用地として把握しやすくするために、この地域を稲田へと変質させることはなかった。しかしながら彼らは、この手つかずの未開の地を、国家の領域として再生することには成功したのである。

地図製作という技術は、国家によりモノとして作られる形式であり、それがまたさらに、国家をひとつかたまりのまとまった存在として建設することに資するものである。しかし、そのこと故に我々は、国家とその地図製作に用いる資料に着目する一方で、地図上の表現が何を示唆していようととも国家の概念を解体する必要があるといえる。これはミシェル・フーコー（Michel Foucault）が言及するところの、資料を用いる実践としての地図製作の「創造する」力に関わる問題であり、これは地図史の前後関係の文脈を把握する上で重要な意味を持つ（Burchell et al. 1991; Crampton and Elden 2007; Foucault 2008; 1998）。

しかしながら、フーコーが本来、ヨーロッパの文脈の中における近代的知識の創造及び政府の近代的形態に基本的な関心を持つ理論家であるように、このような創造力を証明することで、それ自体の問題も生じさせることになる。それにもかかわらず、蝦夷地は日本の律令制下では国境の外に位置付けられ、その後も内政的に区別されていた。このことは、本質的要素において、西洋の、あるいは洗練され客観化されたポスト啓蒙主義、そして世界を表現するための精密な分類学の利用はなかったということを改めて強調するものである。それゆえに、近代ヨーロッパ式の地図作成の導入のみに研究を制約する理由は何もないのである (Bayly 2004; O'Hanlon and Washbrook 1992)。ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) が述べたように、「全ての既存秩序はそれ自身の存在への順応を生み出すものである」 (Bourdieu 1977: 164) が、それは単なる秩序のみにあてはまるものではない。なぜなら、秩序自体が当たり前になっているので、我々が秩序に順応してきたという歴史が書けなくなるからである。蝦夷地の場合、「デカルトの立体座標による幾何学」がなくても、地図上に同じような「暴力的な所有権の地理」 (Blomley 2003: 123) を可視化することができた。しかし、国家は地図化するために「広大な距離に沿って、空間を平面化して区分し、名称を付け変え、これらの表現を統一した」のである (Brealey 2002: 10; Harris 2004: 173)。

今日の北海道、樺太及び千島列島を取り囲む、領域的空間としての蝦夷地の創造とは、蝦夷地の支配を議論する政治的空間を提供した。しかしながら、この地が真に政治的課題として浮上したのは18世紀後半になってからのことである。というのは、1781年の地図製作にみてとれるように、この地をどう再構成するかをめぐり、日本とロシアで争われたからであった。それまでの地図にみられるように蝦夷地それ自体は、その南部と津軽の領域によって枠組みが作られただけでなく、東方に立ちはだかるロシアのカムチャッカ半島によって、そしてその南方部分に向けて孤形を描く千島列島によって型取られていた (松前広長 1781: 125; 高倉新一郎編 1987: 第3図、第9図)。しかし、ロシアとの緊張関係と共に、領域の地図が書き直されるようになった。寺島良安の和漢三才図会が、朝鮮、琉球及び蝦夷の「三国」に朝貢秩序の概念を適用したのはその一例である (寺島良安 1929)。最も有名なものとしては、林子平によるものがあるが、林は蝦夷地の概念を境界づけられた自立した領域として再構成したわけではない。また日本の領域を「枠にはめた」わけでもなく、むしろこの朝貢

空間が日本の防衛のカギとなる場所であることを示すことで、この領域をより広い文脈の中に位置づけたのである（成田修一編 1989: 第27図）。この蝦夷地の自立的位置は、日本の地図作成によって初めて、より広い地理的文脈の中へと創造された。林による最初の地図は、他の帝国の領域が国として分割されたのと類似した方法によって、領域を和人地と蝦夷地に分離し、異なる領域であることを明確にするために色分けされた（高倉新一郎編 1987: 第14図）。本田利明も同様の考え方にに基づき、その後蝦夷地における日本のもろさを強調するようデザインされた地図を幕府に提出した（高倉新一郎編 1987: 第21図）。

しかしこの地図も、林が提起した議論の文脈上でもっぱら考慮される必要がある、「蝦夷国に王と云者もなく、大名と云者もなし…然るときは誰蝦夷国の主と云事もなし」という記述にみられるとおり、この領域に対する幕府の進出の必要性を説いたことを考えなければならない（菊池勇夫編 2003）。松前藩が統治権を剥奪された後にも、松前藩が確定した蝦夷地の領域は維持された。一方、長らくロシアの統治下にあり、恐らくそれまで日本人は見たことがなかっただろう千島列島について最上徳内は、次のように言及している。すなわち、千島列島の島々は全てカムチャッカ半島ほどに遠方にあるが、「御国内に有之候所」であり、これまでにロシア帝国が千島列島北部にまで完全に支配しており、列島はもはや日本に従わないと思慮され、また、もし何も手段を講じなければ、ロシアはますます勢力を強め、「日本の属嶋を年々諸島を随ひ候」というのである（『別本赤蝦夷風説考』、カラー 2005: 15）。こうしたロシアの進出に対抗するためにこそ、近藤重蔵は苦難を乗り越え、択捉島が「大日本恵登呂府」であると宣言する標注を大地に突き立てる偉業を成し遂げたのだった（菊池勇夫 1999: 84）。ある意味では、このことは、寺島の業績に見られるように、当時広く理解されていたことであつたともいえる。このような物でできた指標はどこにおいてもよくみられるものである。エンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kaempfer）が報告するように、「国や大・小名の領地が終わるところには、木か石の柱が立っていて、国境と藩を示す文字が記されているのを見出す」（Kaempfer 1906: Vol. 2, 291 [斉藤信訳]）。しかしながら、この種の指標は、この地域にとっては新しいものであり、18世紀後半から19世紀初頭にかけて作製された多くの地図に見られるように¹⁵、この境界線の指標の位置は、

¹⁵ 国境を択捉島と得撫島の間刻む地図はロシア側でも作成されていた。例え

「紙面上に描かれた線の層に層を重ねること」でただちに「地図記号化」された (Pickles 2004: 5)。国家の境界は、国家を表すために作製された物質を通じてこのように示されるのである。

これらの境界の主張は、蝦夷地を地図化する上で、和内地と蝦夷地を区別する政策をとりながらも領域の統治権を主張した松前藩の役割の上に成り立っている。1789年に勃発した国後目梨(クナシリ・メナシ)の反乱の際には、松前藩は幕府に対し、「私領分蝦夷地クナシリと申す所の夷人」が反乱を起こしたと報告している(『寛政蝦夷乱取調日記』、榎森進 2007: 270)。幕府が、国絵図に記されている松前藩の領域に対する統治権の確定を受入れたことは、「松前と蝦夷は一国にて」というような言及に反映される地位を理解し黙認することを意味したのである(坂倉源次郎 1739: 41)。第1章で言及したとおり、この全ての領域全体を蝦夷地として編入し確定することは、蝦夷に対する交易の権利に基づく統治を権威に対して主張することであった。このような定義は、単なる押し付けではなく、その適用を行う状況を通じて影響を受け、屈折させられもしたのである。同様に、ダニエル・クレイトン(Daniel Clayton)がバンクーバー島について、「未開の地がイギリスの主権という絶対的空間として作り直された」と記した通り、蝦夷の地は松前藩の領域として作り直されたのである(Clayton 2000: 236)。そのようなものとして、権威は認められなかったもののこの領域は幕府に認められたのである。そして1799年と1807年に松前藩の責務が幕府に引き継がれたものの、1821年には再び同藩に戻された。すなわち、蝦夷地の領域の広がり、国家の領域としてこのように再生されたのである。

天保国絵図は、国家が「読み取れるもの (legible)」で蝦夷地を表現している (Scott 1998)。徳川国家の命を受けた松前藩による地図作成の最後の取組みであったこの国絵図は、「地理的身体」に領域を地図化するため、国家自身が構成されたイメージを創り出した。ここで行われたシンボルの選択は明らかに重要性をもっていた。というのは、松前藩の在郷の村には日本のその他の地域と同じシンボルが選択され、蝦夷地の居所地には異なる型が採用されたからである。従って、他の国絵図で用いられている地域ごとの区別のように、和人

ば1848年に魯米会社に派遣した北方地域の探検測量隊のリーダー、船長テベンコフは「ウルップ島はクリル列島における我々の領域最終点である」と述べた (Tebenkov 1981: 34)。

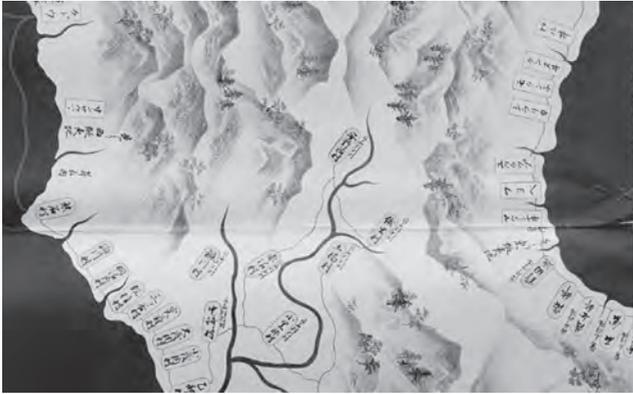


図4 天保国絵図：和人地・蝦夷地の境

天保9年 国立公文図書館

と蝦夷の地の管理が異なるという点を、色彩の違いが強調している。また、楕円形ではなく長方形の記号を使用することで、蝦夷の居所地が徳川国家におけるその他の地域と異なることを強調しているのである。このように、前述のとおり1821年に松前藩に返還され、その後再び幕府によって管理されるようになった領域の地理的広がりを地図は表している。

しかしながら、大半の領域に対する集中的な日本の商業的政治的浸透について何ら言及されない形で地図に表された蝦夷地の支配は、蝦夷の居留地に対する管理の主張を制約し、群島の残りと同じ単位ではかることができることを表した。領域に対し商業的浸透をしていることの特徴は、すべての居所地が川や海岸に沿った所に印されていること、および内陸部が全くの「不毛地帯」として定義直されていることであり、そのことについてはここ50年の間の議論において認識されてきた。蝦夷地における和人の存在は、数多くの交易所にのみ、中井竹山すらも認めたであろう¹⁶。唯一の産業は、和人地に、鷹居の印が多くつけられていることで示されているが、実際の経済活動の大半は、蝦夷地と記

¹⁶ 「赤蝦夷より段々蝦夷を蠶食し併呑すると云ば今は如何なりしや…我版圖に歸せずしてはやむべからずからざる事也、今の蝦夷は域外の事故、…蝦夷若外狄に奪われたらば、又其狄と互市を通じてよく通じ、絶してよくば絶す可、是等は皆度外に置可のみ」中井竹山、「草茅危言」（横川四郎編 1935: 127-29）。

された地域への立ち入りに依拠して行われていた (Howell 1995)。この地図は、蝦夷を領域として編入しただけでなく、この地の農業生産の欠如や、関与の空白等多くの事実を明らかにしたのである。蝦夷を「文明化」し、蝦夷地の「開拓」を試みると主張した人々の意見が結果的には認められたように、特に明らかかなことは、イメージに時間の感覚がないということである。しかし、近代的側面から見ればイメージは奇妙に不明瞭に見えるが、幕府はイメージを再生産し標準化することで空間の表現、つまり「松前嶋」の領域的代表性を「地理的身体」へと統合したのである。イメージに時間の感覚がないことにより、この空間は曖昧な形で国家の地理に統合されているということが、このように覆い隠されており、同じ地理的な理解を人々が受け入れるようにしてしまっている。この領域空間は、1869年に天皇が蝦夷地を北海道へと改称しその開発を命じた時に、新しく作り替えられた。

松前藩の領域は、もはや日本の他の地域と同等となり、それは天保国絵図自体による情報の表現によって示された。このように、国家権力を支える地図作成の形式は一つのみではなく、また統合の歴史も一つのみではない。それは、目に見える形での国家の領域的広がり表現と再生産の継続した歴史であるといえる。そうすることで、徳川国家が直面した境界と、それらが現れてきた社会とが相互にどのように作り合ってきたかが明らかになるであろう。権威が行使され、主張される領域的な範囲は、地図上において創造されたのである。そのような地図製作においては、ティモシー・ミッチェル (Timothy Mitchell) が呼ぶところの国家の効果、即ち漫然とした国家の活動と制度的な国家の活動の反映を結び付けることを通じて国家を創造することに



図5 天保国絵図「松前嶋図」

天保9年 国立公文図書館

ついて、我々は銘記しておかなければならない。徳川政権の地図作成者のデータを普遍的に使いこなす能力が、領域の広がりに対する主張に影響を与えた。計ることのできる領域を超えた国家の影響力は、国家の機能する境界についての我々の認識を形作るのである。

こうした順応の過程を通じて、我々は秩序全てについて語るができるようになる。社会に影響を与える国家について語る時、我々はこれが領域の単位として考えられている「社会」の共同構築であることを知る必要があるし、国家の政策が目指しているのは、支配、規制、社会の管理といったことが、このように理解されることである。このように地図作成は、領域を国家が把握しやすくし、その領域を国家の開発対象とするだけのものではない。これは過度に還元しすぎた考え方であり、国家の存在論的地位が自然や社会に優先し、秩序を再編するという考えは過度に窮屈なものである。監督者が優越的に監視することを認め、領域に対する「切望」と、このような切望が実現されるべき「厳しい物に囲まれた状況」との間に生じるずれや緊張に対し、何ら配慮がなされていない。むしろ国家それ自体を、フィクションとして、それ自体が作り出したものによって作られたものだとして看做すべきである (Agnew 2005, 2009; Geertz 1973, 2004; Runciman 2003)。すなわち、国家それ自体は「本当のものになる」ということであり、政府の実践と状況による共通の効果が国家という「実在の結果」をもたらすのである。地図作成を通じて、国家は領域を把握しやすくするのみならず、その領域を目に見える形で表すことにより、国家自体をも形成するのである (Corrigan and Sayer 1985; Joyce 2002; Mitchell 1991, 2006)。

4. 結語

本稿では、近年における地図作成史の発展について概観し、日本における蝦夷地の位置を例にして、それらを当てはめるとどのような意義があるのかを示そうとした¹⁷。ここで総括すると、第一に、国家を事例に、地図製作が、どの

¹⁷ 蝦夷地を「松前地」からはっきり区別し、化外地として理解することもできる (谷本晃久 2010: 17-28)。ケンベルも同じようなことを述べている、「蝦夷、また蝦夷島 (えぞがしま) は、最北の属する、しかし日本帝国外にある島で

ように空間を表現する際に用いられるかだけでなく、空間を作り出す際の手段として見られなければならないことを主張した。第二に、地図作成に用いられる資料の表現方法が、文化的に、また機能的に決定された空間的概念と結び付いていること、そして地図製作の歴史の中で地図作成の文脈を再構成しようとするならば、これらの基本的概念とより深く関わらなければならないことについて認識することの重要性について述べた。第三に、地図作成は、より規模の大きい物質的、文化的あるいは国家的勢力を反映するものだけに還元すべきではなく、まさにそれが表現しようとする物質・文化・国家の勢力自体を同時に創造することがあるという点を強調した。

アイヌ史の歴史、アイヌと日本人の相互作用及びロシアの進出といった様々な歴史の研究は、これらの相互作用を詳述し再構成しながら、民族を異にする日本人と「蝦夷」の概念に主に焦点をあててきた。一方で、地図製作の諸研究が空間を扱う際には、相変わらず、次第に制度化され正確さが実現していく方法を詳細に示すだけである。より広い解釈は、より大きな効果を有するものである。本稿では、これらの発展の全てを蝦夷地という政治的空間の文化的産物に基づいて理解する必要があると述べ、そしてその空間は地図作成の資料の表現の中で創られるということを主張した。

参考文献（和文）：

- 秋岡武次郎編（1971），『日本古地図集成』（鹿島研究所出版会）。
- 秋月俊幸（1999），『日本北辺の探検と地図の歴史』（北海道大学図書刊行会）。
- 岩下明裕（2010），『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』（北海道大学出版会）。
- 上杉和央（2010），『江戸知識人と地図』（京都大学学術出版会）。
- 海野一隆（1994），「『拾芥抄』古写本における地図 - 上 - 天文 17 年本を中心として」、『ビブリア 天理図書館報』，2-23。
- （2004），『地図の文化史：世界と日本』（八坂書房）。
- （2005），「中世日本人の国土認識」、『日本古書通信』，70（8），8-10。
- 榎森進（2007），『アイヌ民族の歴史』（草風館）。
- 大場四千男（1998），「松前藩の成立過程と蝦夷交易」、『北海学園大学経済論集』，

ある…松前（そばの奥州属島）の監視にある」（Kaempfer and Bodart-Bailey 1999: 44）。しかし、蝦夷地という領域が地図作成により定まったことは、反論できないであろう。

46 (2), 33-92.

- 落合忠士 (1971), 『北方領土：その歴史的事実と政治的背景』(鷹書房).
- 海保嶺夫 (1978), 『幕藩制国家と北海道』(三一書房).
- (1984), 『近世蝦夷地成立史の研究』(三一書房).
- (1985), 『史料と語る北海道の歴史：中世・近世編』(23：北海道出版企画センター).
- (2006), 『エゾの歴史：北の人びとと「日本」』(講談社).
- 紙屋敦之 (1990), 『幕藩制国家の琉球支配』(校倉書房).
- 川上淳 (2003), 「日露関係のなかのアイヌ」, 菊池勇夫 (編), 『蝦夷島と北方世界』(日本の時代史 19：吉川弘文館).
- (2011), 『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』(北海道出版企画センター).
- 川村博忠 (1984), 『江戸幕府撰国絵図の研究』(古今書院).
- (1990), 『国絵図』(吉川弘文館).
- (2010), 『江戸幕府の日本地図：国絵図・城絵図・日本図』(吉川弘文館).
- 菊池勇夫 (1994), 『アイヌ民族と日本人：東アジアのなかの蝦夷地』(510：朝日新聞社).
- (1999), 『エトロフ島：つくられた国境』(吉川弘文館).
- 菊池勇夫 (2003), 『蝦夷島と北方世界』(日本の時代史 19：吉川弘文館).
- 木村東一郎 (1967), 『江戸時代の地図に関する研究』(隣人社).
- 金田章裕・上杉和央 (2012), 『日本地図史』(吉川弘文館).
- 国絵図研究会編 (2005), 『国絵図の世界』(柏書房).
- 黒田日出男 (2001), 「行基式<日本図>とはなにか」, 黒田日出男, メアリ・エリザベス・ベリ, 杉本史子 (編), 『地図と絵図の政治文化史』(東京大学出版会).
- 近藤守重 [近藤重蔵] (1906), 「好書故事」, 國書刊行會編 (編), 『近藤正齋全集』(3：國書刊行會).
- 近藤重蔵 (1993), 「近藤重蔵関係史料」, 旭川市史編集会議編 (編), 『新旭川市史』(第6巻史料1：旭川市).
- カラー, スサンネ (2005), 「天明年間の幕府による千島探検」, 『北海道・東北史研究』, 2, 2-18.
- 小林茂 (1995), 『定本近世被差別部落関係法令集』(明石書店).
- 坂倉源次郎 (1739), 「北海隨筆」, 大友喜作 (編), 『北門叢書第二冊』(1943：北光書房).
- 杉本史子 (1994), 「国絵図」, 朝尾直弘編 (編), 『岩波講座日本通史』(第12巻：岩波書店).
- (1999), 『領域支配の展開と近世』(山川出版社).
- 高木崇世芝 (2000), 『北海道の古地図：江戸時代の北海道のすがたを探る』(五

稜郭タワー).

- (2006), 「江戸幕府の国絵図作成と松前藩の対応」, 北海道史研究協議会 (編), 『北海道の歴史と文化：その視点と展開：北海道史研究協議会創立四十周年記念論集』(北海道出版企画センター).
- (2011), 『近世日本の北方図研究』(北海道出版企画センター).
- 高倉新一郎 (1933a), 「天明以前の蝦夷地開拓意見 (上)」, 『社会経済史学』, 3 (1), 59-80.
- (1933b), 「天明以前の蝦夷地開拓意見 (下)」, 『社会経済史学』, 3 (2), 203-18.
- (1956), 「北海道地図の変遷補遺」, 『北方文化研究報告』, 11 (3), 49-73.
- 高倉新一郎・柴田定吉 (1940), 「我國に於ける千島地圖作製史」, 『北方文化研究報告』, 3 (5), 267-341.
- (1952), 「我國に於ける北海道本島地図の変遷」, 『北方文化研究報告』, 7 (3), 47-166.
- 高倉新一郎編, (1987), 『北海道古地図集成』(北海道出版企画センター).
- 高倉浩樹 (2006), 「十八-十九世紀の北太平洋世界における樺太先住民交易とアイヌ」, 菊池勇夫・真栄平房昭 (編), 『列島史の南と北』(吉川弘文館).
- 高埜利彦 (2006), 「幕藩制国家解体期」, 宮地正人, 等 (編), 『国家史』(新体系日本史1: 山川出版社), 339-75.
- 谷本晃久 (2010), 「『近世アイヌ史』をとりまく国際的環境 (特集 近世東アジアの歴史的構造へのアプローチ)」, 『新しい歴史学のために』, 277, 17-28.
- 寺島良安 (1929), 『倭漢三才圖會』(日本隨筆大成刊行會).
- 中井竹山 (1788), 「草茅危言」, 横川四郎編 (編), 『中井竹山集』(1935: 誠文堂新光社).
- 中村拓編 (1974), 『日本古地図大成』(講談社).
- 浪川健治 (1992), 『近世日本と北方社会』(三省堂).
- 成田修一編, (1989), 『蝦夷地図抄』(沙羅書房).
- 羽田野正隆(1985), 「松前藩と徳川幕府の北方認識一二つの蝦夷図の中心に一」, 藤岡謙二郎 (編), 『北海道地方』(1: 大明堂発行), 29-45.
- 福井保 (1984), 『天保郷帳: 第二冊』(史籍研究會).
- 藤田覚 (1980), 「天保国絵図の作成過程について」, 『東京大学史料編纂所報』, 22-36.
- 船越昭生 (1976), 『北方図の歴史』(講談社).
- ベリ、メアリ・エリザベス (2001), 「統一権力と地図作成: 新たな政治文化の誕生」, 黒田日出男, メアリ・エリザベス・ベリ, 杉本史子 (編), 『地図と絵図の政治文化史』(東京大学出版会).

- 松前藩 (1906), 「松前嶋郷帳」, 『続々群書類従』, 9, 323-25.
- 松前景広 (1643), 「新羅之記録」, 『北海道史』 (第7巻資料1: 北海道史印刷出版共同企業体) .
- 松前広長 (1781), 「松前志」, 大友喜作 (編), 『北門叢書第二冊』 (1943: 北光書房).
- 三谷博 (1997), 『明治維新とナショナリズム: 幕末の外交と政治変動』 (山川出版社).
- 室賀信夫 (1983), 『古地図抄: 日本の地図の歩み』 (東海大学出版会).
- 山下和正 (1998), 『地図で読む江戸時代』 (柏書房).
- 渡邊一郎 (1997), 『伊能測量隊まかり通る: 幕府天文方御用』 (NTT 出版).

参考文献 (欧文):

- Agnew, John A. (2005), 'Sovereignty regimes: territoriality and state authority in contemporary world politics', *Annals of the Association of American Geographers*, 95 (2), 437-61.
- (2009), *Globalization and sovereignty* (Lanham, Md: Rowman & Littlefield Publishers, Inc.).
- Anderson, Benedict (1991; 1983), *Imagined communities: reflections on the origin and spread of nationalism* (London: Verso).
- Andrews, John H. (1996), 'What was a map? The lexicographers reply', *Cartographica: The International Journal for Geographic Information and Geovisualization*, 33 (4), 1-12.
- Bagrow, Leo (1955), 'A few remarks on maps of the Amur, the Tartar Strait and Sakhalin', *Imago Mundi*, 12 (1), 127-36.
- (1985), *History of cartography* [Second Edition, Revised and Enlarged by Raleigh A. Skelton] (Chicago: Precedent Publishing).
- Barrow, Ian J. (2003), *Making history, drawing territory: British mapping in India, c. 1756-1905* (New Delhi: Oxford University Press).
- (2008), *Surveying and Mapping in Colonial Sri Lanka, 1800-1900* (New Delhi: Oxford University Press).
- Bartelson, Jens (1995), *A genealogy of sovereignty* [Cambridge Studies in International Relations 39], (Cambridge University Press).
- Bassin, Mark (1999), 'History and philosophy of geography', *Progress in Human Geography*, 23 (1), 109-117.
- Batten, Bruce L. (2003), *To the ends of Japan: premodern frontiers, boundaries, and interactions* (Honolulu: University of Hawaii Press).
- Bayly, Chris A. (2004), *The Birth of the Modern World, 1780-1914* (Oxford: Blackwell Publishing).

- Berry, Mary Elizabeth (2006), *Japan in print: information and nation in the early modern period* [Asia-local studies/global themes 12], (Berkeley: University of California Press).
- Biggs, Michael (1999), 'Putting the state on the map: Cartography, territory, and European state formation', *Comparative studies in society and history*, 41 (2), 374-405.
- Blomley, Neal (2003), 'Law, property, and the geography of violence: the frontier, the survey, and the grid', *Annals of the Association of American Geographers*, 93 (1), 121-41.
- Bourdieu, Pierre (1977), *Outline of a theory of practice (Esquisse d'une théorie de la pratique)* [Reprint, Translated by Richard Nice], (Cambridge: Cambridge University Press).
- Branch, Jordan (2011), 'Mapping the Sovereign State: Technology, Authority, and Systemic Change', *International Organization*, 65 (01), 1-36.
- Brealey, Kenneth G. (2002), 'First (national) space: (Ab) original (re) mappings of British Columbia'. (PhD Thesis, University of British Columbia).
- Brenner, Neil and Elden, Stuart (2009), 'Henri Lefebvre on State, Space, Territory', *International Political Sociology*, 3 (4), 353-77.
- Brotton, Jerry (1997), *Trading territories: Mapping the early modern world* (Cornell University Press).
- Brown, Delmar M. (1993), *The Cambridge History of Japan, Volume I: Ancient Japan* (New York: Cambridge University Press).
- Burbank, Jane, Von Hagen, Mark, and Remnev, Anatoly (2007), *Russian Empire: Space, People, Power, 1700-1930* (Bloomington: University of Indiana Press).
- Burchell, Graham, Gordon, Colin, and Miller, Peter (eds.) (1991), *The Foucault Effect; Studies in Governmentality, with two lectures by and an interview with Michel Foucault* (London: Harvester Wheatsheaf).
- Burnett, D. Graham (2000), *Masters of all they surveyed: exploration, geography, and a British El Dorado* (Chicago: University of Chicago Press).
- Clayton, Daniel W. (2000), *Islands of truth: the imperial fashioning of Vancouver Island* (University of British Columbia Press).
- Conley, Tom (1996), *The self-made map: Cartographic writing in early modern France* (University of Minnesota Press).
- Corrigan, Phillip and Sayer, Derek (1985), *The great arch: English state formation as cultural revolution* (Oxford: Blackwell Publishing).
- Cosgrove, Denis E. (1999), *Mappings* (Reaktion Books).

- (2003), *Apollo's eye: a cartographic genealogy of the earth in the western imagination* (Johns Hopkins University Press).
- Crampton, Jeremy W. and Krygier, John (2005), 'An introduction to critical cartography', *ACME: An international e-journal for critical geographies*, 4 (1), 11-33.
- Crampton, Jeremy W. and Elden, Stuart (2007), *Space, knowledge and power: Foucault and geography* (Ashgate Publishing Company).
- Darwin, John (2007), *After Tamerlane; The Rise & Fall of Global Empires, 1400-2000* (London: Penguin Books).
- Dodge, Martin, Kitchin, Rob, and Perkins, Chris (2009), *Rethinking maps: new frontiers in cartographic theory* (Taylor & Francis).
- Driver, Felix (1992), 'Geography's empire: histories of geographical knowledge', *Environment and Planning D: Society and Space*, 10 (1), 23-40.
- (2001), *Geography militant: cultures of exploration and empire* (Oxford: Blackwell Publishers).
- Edmonds, Richard L. (1985), *Northern frontiers of Qing China and Tokugawa Japan: a comparative study of frontier policy* (Chicago: University of Chicago).
- Edney, Matthew H. (1993), 'Cartography Without Progress: Reinterpreting the nature and historical development of Mapmaking', *Cartographica: The International Journal for Geographic Information and Geovisualization*, 30 (2), 54-68.
- (1994), 'Mathematical Cosmography and the Social Ideology of British Cartography, 1780-1820', *Imago Mundi*, 46.
- (1997), *Mapping an Empire: the Geographical Construction of British India, 1765-1843* (Chicago: University of Chicago Press).
- (1999), 'Reconsidering Enlightenment geography and map making: reconnaissance, mapping, archive', in David Livingstone and Charles Withers (eds), *Geography and enlightenment*, (Chicago: University of Chicago Press), 165-98.
- (2005), 'The origins and development of JB Harley's cartographic theories', *Cartographica: The International Journal for Geographic Information and Geovisualization*, 40 (1/2).
- (2009), 'The Irony of Imperial Mapping', in James R. Akerman (ed.), *The Imperial Map: Cartography and the Mastery of Empire* (Chicago: University of Chicago Press).
- Elliott, Mark C. (2000), 'The Limits of Tartary: Manchuria in Imperial and

- National Geographies', *The Journal of Asian Studies*, 59 (3), 603-46.
- Fernández-Armesto, Felipe (2007), 'Maps and Exploration in the Sixteenth and Early Seventeenth Centuries', in David Woodward (ed.), *The History of Cartography. Vol. 3, Cartography in the European Renaissance* (University of Chicago Press).
- Fortna, Benjamin C. (2002), *Imperial classroom: Islam, the state, and education in the late Ottoman Empire* (Oxford: Oxford University Press).
- Foucault, Michel (2008; 1998), *Security, Territory, Population: Lectures at the Collège De France 1977-78*, [translated by Graham Burchell] (New York: Picador).
- Gaddis, John L. (2002), *The Landscape of History: How Historians Map the Past* (Oxford: Oxford University Press).
- Geertz, Clifford (1973), *The interpretation of cultures: Selected essays* (Basic Books).
- (2004), 'What is a state if it is not a sovereign?', *Current Anthropology*, 45 (5), 577-93.
- Giddens, Anthony (1981), *A contemporary critique of historical materialism, Vol.1: Power, property and the state* (London: Macmillan).
- Godlewska, Anne and Smith, Neil (1994), *Geography and empire* (Blackwell Publishers).
- Habermas, Jürgen (1991), *The structural transformation of the public sphere: An inquiry into a category of bourgeois society* (The MIT Press).
- Häkli, Jouni (2001), 'In the territory of knowledge: state-centred discourses and the construction of society', *Progress in Human Geography*, 25 (3), 403-22.
- Harley, John B. and Woodward, David (1987), *The History of Cartography Vol.1, Cartography in prehistoric, ancient, and medieval Europe and the Mediterranean* (Chicago: University of Chicago Press).
- (1992), *The History of Cartography Vol.2 Book 1, Cartography in the traditional Islamic and South Asian societies* (Chicago: University of Chicago Press).
- Harley, John B, Laxton, Paul, and Andrews, John H. (2002), *The new nature of maps: essays in the history of cartography* (Baltimore: Johns Hopkins University Press).
- Harris, Cole (2004), 'How did colonialism dispossess? Comments from an edge of empire', *Annals of the Association of American Geographers*, 94 (1), 165-82.

- Harvey, David (2001), *Spaces of capital: Towards a critical geography* (Taylor & Francis).
- Helgerson, Richard (1986), 'The land speaks: cartography, chorography, and subversion in Renaissance England', *Representations*, 50-85.
- (1992), *Forms of nationhood: the Elizabethan writing of England* (Chicago: University of Chicago Press).
- Hostetler, Laura (2000), 'Qing Connections to the Early Modern World: Ethnography and Cartography in Eighteenth-Century China', *Modern Asian Studies*, 34 (3), 623-62.
- (2001), *Qing colonial enterprise: ethnography and cartography in early modern China* (Chicago: University Of Chicago Press).
- (2009), 'Contending Cartographic Claims? The Qing Empire in Manchu, Chinese and European Maps', in James R Akerman (ed.), *The Imperial Map: Cartography and the Mastery of Empire* (Chicago: University of Chicago Press).
- Howell, David (1994), 'Ainu Ethnicity and the Boundaries of the Early Modern Japanese State', *Past and Present*, 142, 69-93.
- (1995), *Capitalism from Within: Economy, Society and the State in a Japanese Fishery* (Berkeley: University of California Press).
- (2005), *Geographies of Identity in Nineteenth Century Japan* (Berkeley: University of California Press).
- Hudson, Mark (1999), *Ruins of identity: ethnogenesis in the Japanese Islands* (Honolulu: University of Hawaii Press).
- Jacob, Christian and Dahl, Edward H. (2006), *The sovereign map: theoretical approaches in cartography throughout history* [English-language edition], (Chicago: University of Chicago Press).
- Joyce, Patrick (2002), *The Social in Question: New Bearings* (Routledge).
- Kaempfer, Engelbert and Bodart-Bailey, Beatrice M. (1999), *Kaempfer's Japan: Tokugawa culture observed* (Honolulu: University of Hawaii Press).
- Kaempfer, Engelbert (1906), *The History of Japan, 3 vols* (Glasgow: James MacLehose and Sons).
- Kantorowicz, Ernst H. (1957), *The king's two bodies: a study in mediaeval political theology* (Princeton: Princeton University Press).
- Kappeler, Andreas (2001), *The Russian Empire: A Multiethnic History*, [translated Alfred Clayton], (Harlow, England: Longman).
- (2004), 'The ambiguities of Russification', *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History*, 5 (2), 291-97.

- Kish, George (1949), 'Some aspects of the missionary cartography of Japan during the sixteenth century', *Imago Mundi*, 6 (1), 39-48.
- Kitagawa, Kay (1950), 'The Map of Hokkaido of G. de Angelis, ca 1621', *Imago Mundi*, 7 (1), 110-114.
- Kivelson, Valerie A. (1999), 'Cartography, autocracy and state powerlessness: The uses of maps in early modern Russia', *Imago Mundi*, 51 (1), 83-105.
- (2006), *Cartographies of Tsardom: the land and its meanings in seventeenth-century Russia* (Cornell University Press).
- (2009), '"Exalted and Glorified to the Ends of the Earth" - Imperial Maps and Christian Spaces in Seventeenth- and Early Eighteenth-Century Russian Siberia', in James R Akerman (ed.), *The Imperial Map: Cartography and the Mastery of Empire* (Chicago: University of Chicago Press).
- Konvitz, Josef W. (1987), *Cartography in France, 1660-1848: science, engineering, and statecraft* (Chicago: University of Chicago Press).
- Kratochwil, Friedrich (1986), 'Of systems, boundaries, and territoriality: An inquiry into the formation of the state system', *World Politics: A Quarterly Journal of International Relations*, 27-52.
- Latour, Bruno (1987), *Science in action: How to follow scientists and engineers through society* (Harvard University Press).
- Lefebvre, Henri (1991), *The production of space* (Oxford: Blackwell).
- Lefebvre, Henri, Brenner, Neil, and Elden, Stuart (2009), *State, space, world: selected essays* (Minneapolis: University of Minnesota Press).
- Lewis, James B. (2003), *Frontier contact between Chosŏn Korea and Tokugawa Japan* (Routledge).
- Lieven, Dominic (2002), *Empire: the Russian Empire and its rivals* (Yale University Press).
- Millward, James A. (1999), '"Coming onto the Map": "Western Regions" Geography and Cartographic Nomenclature in the Making of Chinese Empire in Xinjiang', *Late Imperial China*, 20 (2), 61-98.
- Mitchell, Timothy (1991), 'The Limits of the State: Beyond Statist Approaches and Their Critics', *The American Political Science Review*, 85 (1), 77-96.
- (2006), 'Society, economy and the state effect', in Aradhana Sharma and Akhil Gupta (eds.), *The anthropology of the state: a reader* (Oxford: Blackwell), 167-86.
- Morris, Ian (2010), *Why the West rules-- for now: the patterns of history, and what they reveal about the future* (New York: Farrar, Straus and Giroux).
- Mukerji, Chandra (1997), *Territorial ambitions and the gardens of Versailles*

- (Cambridge University Press).
- (2006), 'Printing, cartography and conceptions of place in Renaissance Europe', *Media, Culture & Society*, 28 (5), 651.
- (2009), *Impossible engineering: technology and territoriality on the Canal du Midi* (Princeton University Press).
- Neocleous, Mark (2003), 'Off the map: On violence and cartography', *European Journal of Social Theory*, 6 (4), 409.
- Nobles, Gregory H. (1993), 'Straight Lines and Stability: Mapping the Political Order of the Anglo-American Frontier', *The Journal of American History*, 80 (1), 9-35.
- O'Hanlon, Rosalind and Washbrook, David (1992), 'After orientalism: culture, criticism, and politics in the Third World', *Comparative studies in society and history*, 34 (1), 141-67.
- Olsson, Gunnar (2007), *Abysmal: a critique of cartographic reason* (Chicago: University of Chicago Press).
- Ooms, Herman (1996), *Tokugawa village practice: class, status, power, law* (Berkeley: University of California Press).
- (1998), *Tokugawa ideology: early constructs, 1570-1680* [Michigan classics in Japanese studies no. 18], (Ann Arbor, Michigan: Center for Japanese Studies, University of Michigan).
- Perdue, Peter C. (2005), *China Marches West: The Qing Conquest of Central Eurasia* (Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press).
- Pickles, John (2004), *A history of spaces: cartographic reason, mapping, and the geo-coded world* (London: Routledge).
- Pomeranz, Kenneth (2000), *The Great Divergence: China, Europe and the Making of the Modern World Economy* (Princeton: Princeton University Press).
- Postnikov, Alexey V. (1996), *Russia in maps: a history of the geographical study and cartography of the country* (Moscow: Nash Dom-L'Age d'Homme).
- Ramaswamy, Sumathi (2001), 'Maps and mother goddesses in modern India', *Imago Mundi*, 53 (1), 97-114.
- (2002), 'Visualising India's geo-body', *Contributions to Indian sociology*, 36 (1-2), 151.
- Ravina, Mark (1999), *Land and lordship in early modern Japan* (Stanford University Press).
- Richardson, Paul B. (2011), 'At the Edge of the Nation: The Southern Kuril Islands and the Search for Russia's National Destiny', (PhD Thesis,

- University of Birmingham).
- Riggsby, Andrew M. (2003), 'Pliny in space (and time)', *Arethusa*, 36 (2), 167-86.
- Runciman, David (2003), 'The concept of the state: the sovereignty of affliction', in Quentin Skinner and Bo Stråth (eds.), *States and Citizens: History, Theory, Prospects* (Cambridge: Cambridge University Press), 28-38.
- Sahlins, Peter (1990), 'Natural Frontiers Revisited: France's Boundaries since the Seventeenth Century', *The American Historical Review*, 95 (5), 1423-51.
- Sakihara, Mitsugu (1967), *The government of the Kingdom of Ryukyu, 1609-1872*, [Reprinted 2001] (Gushikawa: Yui Publishing).
- Schmidt, Benjamin (1997), 'Mapping an Empire: Cartographic and Colonial Rivalry in Seventeenth-Century Dutch and English North America', *The William and Mary Quarterly*, 54 (3), 549-78.
- Schütte, Joseph F. (1952), 'Map of Japan by father Girolamo de Angelis', *Imago Mundi*, 9, 73-78.
- Scott, James C. (1998), *Seeing like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition have Failed* (New York: Yale University Press).
- Seed, Patricia (1995), *Ceremonies of possession in Europe's conquest of the New World, 1492-1640* (Cambridge University Press).
- Slezkine, Yuri (1994), *Arctic mirrors: Russia and the small peoples of the North* (Cornell University Press).
- Smith, Neil (2008), *Uneven development: Nature, capital, and the production of space* (University of Georgia Press).
- Smith, Richard J. (1996), *Chinese Maps: Images of "All Under Heaven"* (Oxford University Press, USA).
- Smits, Gregory (1999), *Visions of Ryukyu: identity and ideology in early-modern thought and politics* (Honolulu: University of Hawaii Press).
- Soja, Edward W. (1979), 'The political organization of space', [Resource Papers No. 8] (Washington DC: Association of American Geographers).
- Spruyt, Hendrik (1994), *The Sovereign State and Its Competitors: An Analysis of Systems Change* (Princeton: Princeton University Press).
- Stephan, John Jason (1969), 'Ezo under the Tokugawa bakufu, 1799-1821: an aspect of Japan's frontier history' (Reprint of the author's PhD Thesis, University of London).
- Talbert, Richard J. A. (2008), 'Greek and Roman Mapping: Twenty-First Century Perspectives', in Richard Talbert and Richard Unger: *Cartography in antiquity and the Middle Ages: fresh perspectives, new*

- methods* (Brill Academic Publishers), 9-27.
- Teben'kov, Mikhail Dmitrievich and Pierce, Richard A. (1981; 1854), *Atlas of the northwest coasts of America: from Bering Strait to Cape Corrientes and the Aleutian Islands with several sheets on the northeast coast of Asia*, [Reprint: Alaska history no. 21] (Kingston, Ontario: Limestone Press).
- Teschke, Benno (2002), 'Theorizing the Westphalian System of States: International Relations from Absolutism to Capitalism', *European Journal of International Relations*, 8 (1), 5-48.
- Thongchai Winichakul (1994), *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation* (Honolulu: University of Hawaii Press).
- Thrower, Norman J.W. (2007), *Maps & civilization: cartography in culture and society* (Chicago: University of Chicago Press).
- Turnbull, David (2000), *Masons, tricksters, and cartographers: comparative studies in the sociology of scientific and indigenous knowledge* (Australia: Harwood Academic).
- Unno, Kazutaka (1991), 'Government cartography in sixteenth century Japan', *Imago Mundi*, 43 (1), 86-91.
- (1994), 'Cartography in Japan', *The History of Cartography: Cartography in the Traditional East and Southeast Asian Societies*, 346-477.
- Vaporis, Constantine N. (2008), *Tour of duty: samurai, military service in Edo, and the culture of early modern Japan* (Honolulu: University of Hawaii Press).
- Walker, Brett L. (2001), *The Conquest of Ainu Lands: Ecology and Culture in Japanese Expansion, 1590-1800* (Berkeley: University of California Press).
- (2007), 'Mamiya Rinzo and the Japanese exploration of Sakhalin Island: cartography and empire', *Journal of Historical Geography*, 33 (2), 283-313.
- Wigen, Kären (2010), *A malleable map: geographies of restoration in central Japan, 1600-1912* [Asia, local studies/global themes 17], (Berkeley: University of California Press).
- Wong, R. Bin (1997), *China Transformed: Historical Change and the Limits of European Experience* (Ithaca: Cornell University Press).
- Wood, Denis (1994), 'P.D.A. Harvey and Medieval Mapmaking: An Essay Review', *Cartographica: The International Journal for Geographic Information and Geovisualization*, 31 (3), 52-59.
- Wood, Denis and Fels, John (1992), *The power of maps* (New York: Guilford Press).

- Wood, Denis, Fels, John, and Krygier, John (2010), *Rethinking the power of maps* (New York: Guilford Press).
- Woodward, David (2007), *The History of Cartography. Vol. 3, Cartography in the European Renaissance* (Chicago: University of Chicago Press).
- Woodward, David and Harley, John B. (1994), *The History of Cartography. Vol.2 Book 2, Cartography in the traditional East and Southeast Asian societies* (Chicago: University of Chicago Press).
- Woodward, David and Lewis, G. Malcolm (1998), *The History of Cartography. Vol. 2 Book 3, Cartography in the traditional African, American, Arctic, Australian, and Pacific Societies* (Chicago: University of Chicago Press).
- Yee, Cordell D.K. (1994a), 'Chinese maps in political culture', *The History of Cartography Vol. 2 Book 2*, 71-95.
- (1994b), 'Traditional Chinese cartography and the myth of westernization', *The History of Cartography Vol. 2 Book 2*, 170-202.
- (1994c), 'Taking the World's Measure: Chinese Maps between Observation and Text', *The History of Cartography Vol. 2 Book 2*, 96-127.
- Yonemoto, Marcia (2003), *Mapping early modern Japan: space, place, and culture in the Tokugawa period, 1603-1868* [Asia-local studies/global themes 7] (Berkeley: University of California Press).
- Zandvliet, Kees (1998), 'The Contribution of Cartography to the Creation of a Dutch Colony and a Chinese State in Taiwan', *Cartographica: The International Journal for Geographic Information and Geovisualization*, 35 (3), 123-35.